

特集

災害に負けない心

岩手県釜石市にある「クエスト松原店」がランドオープンしたのは、東日本大震災から約5年経った今年3月19日。同店は甲子川河口付近にあり、旧店舗は地震直後の津波で骨組を残して全壊した。経営する新栄（岩手県盛岡市）の柳川純二社長は、「地域の人々のためにどうしても再建したい」と切実に願い、同じ場所に開店した。

多くの建物が土台から流されたエリアでの再建は決して容易ではなかった。しかし、復興事業を推進してきた釜石市役所、新栄、建物をデザインした田村設計、施工会社などの多くの人々が力を合わせることでランドオープンにこぎつけた。

「旧店舗で顔なじみだった常連さんに、『また来たよ』と声をかけられ涙が止まらなかった」。5年ぶりに「クエスト松原店」に復職したあるスタッフは、ランドオープンの日の出来事が忘れられない。

大震災の爪痕はあまりにも大きく、被災前の生活に戻っていない人も多い。今日も夕暮れ時になると、「クエスト松原店」に明かりが灯る。復興に取り組む人々がほんのひと時でも安らげ、街の未来を照らす場所であることの証として。

▲





A／家屋や車が見るみるうちに流されていった B／翌日には自衛隊が救援に駆けつけ、物資の搬送を行った C／避難所を訪れ、被災者に声をかける野田武則釜石市長（栗林小学校） D／幹線道路も各所で分断された

ニュースや動画サイトでこの情景を見た人も多い（市役所近くの高台から）



写真・パース提供／釜石市 ※「ミッフィーカフェかまいし」の写真は（株）ディック・ブルーナ・ジャパンの協力で掲載 ※「写真／APJ」とあるものは、本誌が撮影

釜石市の復興

その瞬間は唐突にやってきた。2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0、震度6弱の地震が釜石市を襲う。午後3時21分には、釜石湾での最大波である9.3mの大津波が沿岸に到達した。釜石市で失われた尊い命は1062人（行方不明者152人、関連死認定者104人を含む）。住宅は1万6182戸の3分の1にあたる4705戸が被災した。地震発生当時の状況を、釜石市復興推進本部都市整備推進室の職員の方3人に伺った。

3.11の忘れ得ぬ記憶

当時総務課秘書係に勤務していた藤井圭一さん（現都市整備推進室副主幹）は、室内の備品が倒れないよう渾身の力で押さえながら揺れに耐えた。「そのあとすぐ屋上に上がり、市内に火災が発生していないか、津波が来ないか警戒していました」30分ほどで、海がざわめいているのが見え、すぐに大波が防潮堤を超えた。誰かが「逃げる」と叫んでいた。市



藤井さん

役所近くの避難場所である高台に駆け上った。「人が津波に飲まれるのが見えました。停電で信号機が点かず大渋滞している車が、みるみる流されていく様子も目に焼き付いています」。

第4庁舎は1階の天井まで浸水し、都市計画課のパソコンデータがすべて消失するなどの被害が出た。

区画整理係長の佐々木義友さんは、当時都市計画課で、この日は盛岡市の岩手県庁出張していた。会議を開いているとき、携帯電話の緊急地震速報の



佐々木さん

警報音が鳴った。釜石市役所に戻ろうとしたが、できたばかりの仙人峠道路は橋桁がずれ、通行止めになっていた。「旧道を通り、なんとか釜石駅前まで辿り着きました。市役所まで2kmほどの道路が随所で分断、そこからが途方もなく遠かったですね」

駅前の鉄橋の下をくぐる道には海水があふれるほど残っている。排水ポンプを調達してきて、なんとか車が通れるようになったのは深夜のこと。瓦礫を避け、迂回しながら市役所にたどり着く頃には夜が明けていた。

避難所の体育館は人でいっぱいだった。東北地方の春先は冷え込む。毛布も全員に行き渡るほどの数はない。「校庭の焚火の周りに暖をとる人たちがた

くさん集まってきました。人心地がついて、初めて「たいへんなことが起こったんだ」と現実味がわきました」

本間良春さん（都市整備推進室室長）は、地震発生時水道事業所にいた。事業所はかなり内陸部にあるため津波の被害はなかったが、津波の直後に配水池の水位が急に下がった。海側の水道管が損傷して、そこから水道水が



本間さん



写真／APJ



写真／APJ

市民ホール(仮称)の建設が進む東部地区は中心市街地として再生される

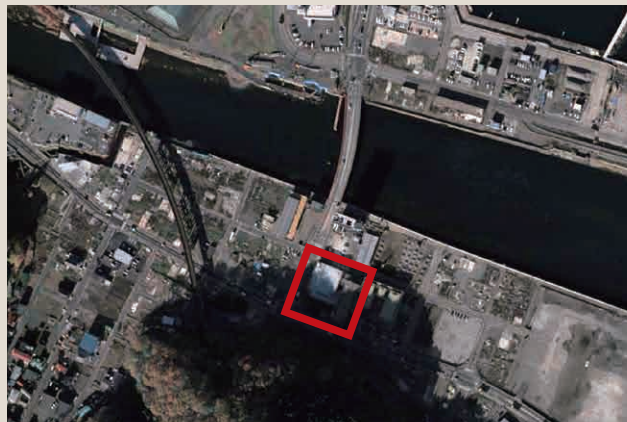
E／釜石は、鉄のまち。現存する日本最古の洋式高炉跡を有する橋野鉄鉱山が世界遺産に登録された。写真は現在の釜石市街地。F／釜石市は、鉄のまち。現存する日本最古の洋式高炉跡を有する橋野鉄鉱山が世界遺産に登録された。写真は現在の釜石市街地。G／釜石市は、鉄のまち。現存する日本最古の洋式高炉跡を有する橋野鉄鉱山が世界遺産に登録された。写真は現在の釜石市街地。



写真／APJ



F



釜石・松原地区の空撮写真。震災前(左)と震災後。赤枠内が「クエスト松原店」

ラグビーW杯開催決定

2019年のラグビーワールドカップ日本大会の会場の一つとして釜石市が選ばれた。釜石市は、「ラグビーのまち」としても知られる。松尾雄治らを擁した新日鉄釜石ラグビー部(現釜石シーウェイブスRFC)は、日本選手権で1978年から7連覇を成し遂げた。W杯開催を受け建設される「釜石鵜住居復興スタジアム」(仮称)の収容人員は約1万6000人。復興のシンボルとして、他のスポーツやイベントにも使われる予定だ。



本設観客席約6000席、仮設観客席約1万席のスタジアム



「ミッフィーカフェかまいし」のスタッフとミッフィー
Illustrations Dick Bruna©copyright Mercis bv.1953-2016 www.miffy.com

使用の許諾にあたり、「設立のプランに心を動かされ、ミッフィーのイラストレーションが使われることをとても嬉しく、誇りに思う」という言葉を添えた。ミッフィーの作者、ディック・ブルー

釜石市は視察に訪れる全国の自治体関係者などのため、復興の進捗状況を紹介する冊子を発行している。タイトルは「撓まず屈せず」。撓むには、心が疲れるという意味もある。家を流され家族を失い、経済的に困窮している人々もまだ多い。それでも愛着のある地域にしっかりと根を下ろし、あきらめずに力強く生きていく。そんな市民の気持ちを代弁しているようだ。

ナさんは、東日本大震災の発生から数週間後、涙を流したミッフィーの絵を日本の人々のために贈っている。着色されていない真っ白なミッフィーは、人々が震災前のように「色彩のある日常生活」を取り戻したときに、思い思いの色を塗れるようにという願いが込められているようにも感じられる。

震災に負けない街へ

「クエスト松原店」がある嬉石・松原地区の震災前と震災後の空撮写真を見てほしい。津波に襲われたエリアの状況が一目瞭然だ。津波に強い街として復興するために、土地のかさ上げや道路整備をする「都市再生区画整理事業」の対象地区となり、竣工まで長い時間がかかると当初から予想された。都市再生区画整理事業は、まず地権

際限なく漏れていたからだ。内陸部でも破裂したり漏水した水道管がかなりあった。漏水箇所を突き止めるため、物音のしない深夜に作業をすることも多く、事務所に数日間泊まり込んだ。「一番辛かったのは、震災後3日目によりやく無事を確認し合った家族に会えなかったことですね」甲子川が釜石湾に注ぐ河口付近にある「クエスト松原店」の被害は、さらに大きかった。高さが4階建てのビルほどの津波に襲われ、店舗が全壊した。地震発生と同時に営業を中止、遊技客には全員避難してもらっていた。しかし、スタッフの一人が逃げ遅れ、津波にさらわれた。幸い、たまたま押し流されてきた車が壁を突き破り、体を通るだけの穴が空いた。非常階段にたどり着き屋上に逃れることができたため、九死に一生を得たという。

日常の色彩を取り戻す

インフラの整備はもちろんだが、人と交流したり文化にふれあう機会を増やすことで、被災した人々の心を「復興」することも欠かせない。昨年オープンした釜石情報交流センターには、日本で唯一釜石オリジナルの「ミッフィーカフェかまいし」がある。市民が集まり、お茶を飲みながら意見を交わしたり、交流できる場所として作られた。

ミッフィーの版元であるオランダ・メルシス社マネージングディレクターのマーヤ・ケルコフさんは、日本の代理店であるディック・ブルー・ナ・ジャパンを訪れ、釜石市役所の職員と面談した。その時、ゼロから何かを再建し、傷だらけの状態から良い物を作り出そうとする釜石の人々の熱意と努力に感動したという。また、前に進むという意思決定のなかに市民一人ひとりが関与していることにも感銘を受けた。版權



震災直後の「クエスト松原店」周辺の様子



周辺の道路も整備された現在の店舗

イスは最小限に抑え、いつでも広く使えるレストコーナー



「今日も元気でお客様のために頑張ります」とホースをとっくられたスタッフ 左端が小倉係長、右から2人目が菊地さん

クエスト松原店の復興

震災前と同じ場所に「クエスト松原店」(岩手県釜石市)がグランドオープンして4カ月。新栄(岩手県盛岡市)の系列店のなかでも最も津波の被害が大きかった同店には、旧店舗の常連客が少しずつ戻ってきている。震災時やグランドオープン時の様子について、新栄の取締役・山田哲郎営業部長やスタッフの方々に伺った。

2011年3月11日、午後3時21分。大津波の第2波が堤防を越え甲子川を遡上し始めた。津波は、「クエスト松原店」の背後にある山にいったんぶつかった後、より破壊力を増した引き潮となって同店に襲いかかった。

この少し前、来店客やスタッフは店を出て山側に避難していた。ところが、主任の中村さんは、金庫のカギを閉め忘れたように思い、一人で店舗に戻る。直後に1階フロアに浸水が始まり、瞬く間に天井に届く勢いで水かさが増した。海水に飲まれた中村主任が「もうだめだ」と思ったとき、1台の車が流されてきて、店舗の壁を突き破った。穴から見えた非常階段で屋上に駆け上がり難を逃れた。

今年3月19日のグランドオープンの日、中村主任の元気な姿があった。「店舗が全壊してしまったので、スタッフの中には系列店に異動したり、一度離

職した後また松原店に復職したスタッフが何人かいます。彼もその一人です」(山田部長)

山田部長は震災当時、系列店の責任者を務めていた。翌年から、店舗再建に向けた最高責任者として、週の半分は本社がある盛岡市から車で往復5時間ほどかけて釜石に向かい続けた。

「釜石市はうちの会社にとってゆかりがある土地。先代の社長が昭和の時代に最初の店舗を創業しました。今の柳川純二社長が同じ場所です。元に戻したい」と熱望したのも、そういう理由があるんです」

小倉雄也営業係長は、震災当時、宮古店に勤務していた。

「被害は松原店ほどではありませんが、駐車場まで水が来しました。停電していたので、車載テレビで釜石のニュース映像を見ましたが、松原店が大変なことになったと本当に驚きました」

復興した「クエスト松原店」は設置台数384台(パチンコ256台・パチスロ128台)の郊外型中規模店。グランドオープンの日は、来店客であふれ400台程度収容できる駐車場に車が入りきれなくなるほどだった。

「クエスト松原店」の設計を担当したのは田村設計。「田村さんの本社は名古屋。実は、うちの柳川社長も私も愛知県の出身なんです。身内にも業界の人間がたくさんいて、田村さんの評判を聞いていたのでお願いすることになりました。これも何かのご縁ですね」(山田部長)

新栄側から提示したのは、設置台数や駐車場の収容能力、台間や通路の広さ、天井の高さなど。もう一つ、「被災地の人々が集えるコミュニティスペース」として、レストコーナーにたっぷりゆとりをもたせよう希望した。デザインは田村設計東京事務所の服部高宏所長に一任、提案されたプランを元に打ち合わせを重ね、細部を詰めていった。

女性スタッフの菊地さんは、震災当日遅番だったが道路が津波に襲われ出勤できなかった。

「3年間勤めていた職場がなくなりショックでした。震災後宮古店に異動させていただいたんですが、松原店が再開することになって戻ってきました」



山田部長

グランドオープンの日、菊地さんは、一人のおばあさんに声をかけられた。「元氣だったかい? ようやくお店ができたね。前みたいにまた来るよ」。旧店舗のときの常連さんだった。

被災地に個性を主張しすぎるデザインは似合わない。だれもが抵抗なく入店できる洗練されたエクステリア、快適な時間を過ごせる商業施設やホテルのようなインテリアが、多くのリピーターを生んでいる。

「地域の人々に親しまれる店舗をもう一度作りたいという、我々の想いを田村設計さんが形にしてくれました。建物は新しくなったけれど、ずっと通い続けてきたような居心地の良さを多くのお客様が感じてくれる。そんな店舗ができて本当に良かったと思います」(山田部長)

[A]



夜とはまったく違う印象を与える外観



赤と白を基調にしたシンプルな景品カウンター。ひさしの部分に外観と同じツタの意匠を入れた

Quest Matsubara

Hall Design

何年たっても色あせない エクステリア&インテリア



機能性と清潔感を重視したトイレ



そばやカレーなど20種類以上の軽食を出す店舗を設置した

中央通路付近の柱にミラー材を貼り圧迫感がないように工夫した



往復10時間かけて、 毎週釜石に通いました。

田村設計東京事務所

服部高宏 所長



す。店休日には、ここで集会やミニコンサートだって開けます。それから、この辺りには外食する店がまったくありませんから、軽食を提供する広くてきれいな店舗をつくりました」

遊技フロアなどのインテリアは、ポイントとなる色以外はあまり使わず、作り込み過ぎない広々と快適な空間にした。

「駐車場もなるべく高くして、万一の際に屋上に避難できるようにしました。それから、外周部はパネルではなく、フェンスにしました。津波の際に水が通り抜けやすく、助けを求める人がいたら見つけやすくするためです。それから、地震で天井が落下しないように壁と天井の間に2センチほど離し、間に緩衝材を入れました。これなら、相当大きな地震がきても大丈夫です」

「安全なホールづくりのためのアイデア



は、何度も現地に出向いたからこそわいてきた。被災したいろいろな人の話を聞いて生まれた工夫も多い。

「あと100年くらいはあんな地震は来ないかもしれません。でも、被災した人のことを思うと、絶対に安全なホールを作つてやろうという気持ちになりました」

竣工記念式典で、服部所長は『クエスト松原店』の設計コンセプトを次のように紹介したと言う。「建物は4階

『クエスト松原店』再建の設計責任者として約4年、釜石市に通い詰めた服部所長。竣工式でのあいさつで、設計のコンセプトを出席者に説明したところ、あちこちで目頭を押さえる姿が見られたという。関係者が涙したスピーチの内容について伺った。

復興のきつかけをつくりたい

東京から釜石に向かうにはいくつかのルートがある。服部所長は主に、東北新幹線で新花巻まで行き、そこからレンタカーを使った。片道約5時間、往復で10時間かかる道のりだ。「たいていは日帰りなので、始発の新幹線に乗って行き、最終で帰る。週1回、そんな生活を4年間続けました」。

新築から設計の依頼があったのは2012年の3月ごろ。『釜石の状況はご存知でしょうけれども、お願いします』と、言われました。行ってみると、『クエスト松原店』の建物も周辺の道路も破壊されてひどい状況だった。再建に時間がかかるのはすぐわかった。

「現地に行くと、誰もが消沈していることを肌で感じました。あれだけ周りの人が亡くなったたり家を流されたりしたら、すぐに『さあ、街を挙げて復興しよう』という気持ちにはなれません。でも、誰かが復興のきつかけを作らなければならぬ。それを田村設計にやらせてくれるならば、光栄なことだと

に、光の箱”を置き、それをつないでいるようなデザインです。この店があるところは、4つの方向に幹線道路が伸びている交通の要衝。『クエスト松原店』はこの場所にあつて希望の光で四方を照らす灯台のような存在でありたい。また、良く見るとツタの模様があります。しっかりと根を生やしたツタは、丈夫で決して切れることがありません。力を合わせ復興に取り組んでいるみなさんの絆のように」

復興する街の未来をしっかりと照らす

田村設計の田村和雄社長には、「業



思いました」

津波に強いまちづくりのために、復興に際し地域の多くで土地をかさ上げする区画整理事業を行うことになった。『クエスト松原店』の敷地は5メートルのかさ上げをした。

「松原地区は川に面した谷あいのような地形なんです。店舗用地はその斜面にあり、基礎工事にたいへんな時間と費用がかかりました」

まず、事前調査の段階で、通常の2倍のボーリングを打ち込んだ。コンピュタでシミュレートしてどこにどのような杭を打てば、安全性が保てるか確認してから工事を始めた。杭は通常コンクリートだが、さびない鉄製の杭を100本近く打ち、同程度の災害が起きても絶対大丈夫なようにした。

100年安心できるホールをめざす

「広さは60坪くらい。施主様の希望でもあったんですが、復興を進めている街のコミュニティスペースとして、地域の人々が集える広いスペースを確保しました。パチンコを打たない方も普段からぜひ来てくださいという発想で

界がもつと社会に認められ、ここで働く人々がもつと自信をもてるようにしたい」という信念がある。だからこそ、奇をてらうのではなく、公共施設やシティホテルのような、デザイン性に優れたメッセージを感じさせるホールづくりを提案しているのだ。『クエスト松原店』は、こうした田村社長の想いを最も体現した店舗の一つと言える。

取材を終えた夜、『クエスト松原店』の交差点から少し離れた場所に立つてみた。周囲には本当に何も無いのだ。通りかかる車も少なく、闇と静寂だけが広がっている。

グラントオーブンにやってきたお年寄りが、スタッフに「再建できて良かった」と伝えた気持ちに嘘はない。『クエスト松原店』が、遙か遠くにあり街の未来をしっかりと照らす「希望の灯」であることは、現地に行つてみれば実感できる。

取材で出会った人たちは、皆あたたかく、そして逞しく生きていた。釜石が震災前の賑わいと日常の落ち着きを取り戻すまで、まだ何年もかかるだろう。しかし、それは必ず実現するに違いない。